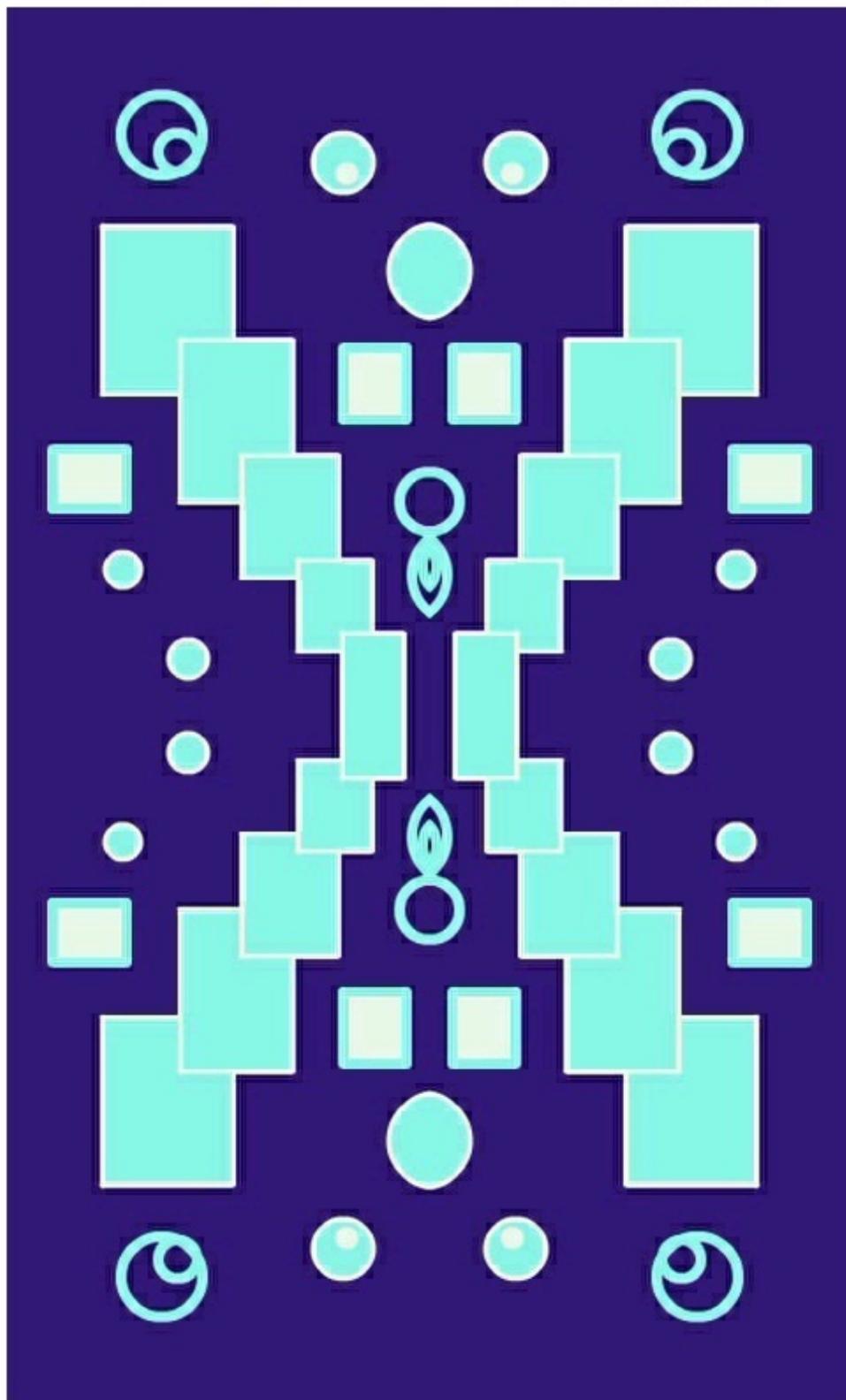


# イヴの階段



mikatuki98

クリスマス・イヴの前日。梅吉は何処かの階段を降りていた。幅のある階段は5人くらい横並びでも降りられるくらい広い。木製の階段だが誰の足音もしない。もちろん梅吉自身の足音も聞こえない。それに今、何階の階段を降りているのか分らない。それまで誰かとすれ違ったような気もするし、誰にも会わなかったような気もする。

ふと、メガネを掛けた青年とすれ違った。お互い無視する訳でも無く、かと言って会釈するでも無く、いつもすれ違っている人のような自然な感覚ですれ違った。

『学生……？ でもないか』

直ぐにまた別の人物とすれ違った。少し離れているが今度は見覚えがある。

『あっ…… 彼はたしか、ナインティーンナインの岡村？ あの目はそうだな』

彼は牛のキグルミを着ていた。普段でもあんな恰好をしてるのだなと梅吉は思った。階段はもう何段も降りている筈なのに、終わりが無い。

「う・め・き・ち」

突然、耳元で声がした。ハッとした梅吉の目にフクロウのようにふっくらとしたまん丸の猫が階段を昇ってきた。顔の色は黄土色。梅吉とかなり近い距離だ。梅吉はその顔に釘付けになった。

『フクロウ猫？』

梅吉は咄嗟にそう思った。しかし身体は人間の女の子のようだ。もちろん言葉は交わさない。すれ違った後、梅吉は彼女の顔が脳裏から離れなかった。しばらくして、また声が何処からともなく聞こえてきた。今度は耳元ではなく、階段全体に響いている。

「うめきち～ 今日犬じゃないんだね～？ 牛のかぶりものは着ないの～？」

梅吉はドキッとして自分の身体を見た。すると自分の身体がいつの間にか犬になって、おまけに牛のキグルミを来ている。

「えっ？ オレは人間だぞ！ おいおい、なんで犬なんかになっちゃってんだよ！？ ……痛っ！」

梅吉は牛のキグルミのせいで足を滑らせ、階段に尻餅をつき、その勢いでドンドンと一段ずつ落ち始めた。

「あ・た・た・た・た……」

最後の段に着て踊場で止まる筈が、急に目の前に何も無くなり、梅吉はストンと空を落ちて行った。

「わあ～～～～～！」

空に響く梅吉の声。遠くから聞こえてくる鈴の音。ドサッと梅吉が何かの中に入ったと思ったら、そのまま気を失ってしまった。

「いや～ん、可愛い♪ 見て見て！ ほら、犬が牛のキグルミ着てるう～」

「美々子、メリークリスマス♪ ちっこいけど私からのプレゼント」

「歩々子、ありがとう～♪ 大事にするわあ～あ、名前、梅吉だって！ あいつと同じだあ～」

「美々子、梅吉のこと好きって言ってたし……ね♪」

「いや～ん、梅吉には内緒だよお～ きゃはは」

梅吉が正気を取り戻すと、憧れの美々子嬢のマスコットになっていた。

『あ、オレ！ オレだよ、美々子！ オレも美々子のこと好きだ！ おーい！ おーい！ オレだよ！』

梅吉の叫びは美々子には届かない。

『美々子…… オレ…… ずっとこのままか？ ずっと一緒がイイってオレの願いがこれなのかよ～？ サンタさんよ～ 何でオレが袋に入れられなきゃなんないんだよ～』

「梅吉、チュ♪ ずっと一緒だよ！」

『嗚呼、美々子…… オレ…… ずっと一緒なら…… このままでもいいか…… ワア～ン・モ～モ～モ～』

了